12

Vol.12 「つとめ場所」

“おやさまを求めて” 中山正直

Happistでチェック!

01 飯降伊蔵さんの入信

をびや許しを道あけとして、おやさまの教えが少しずつ広がり、お話を熱心に聞く人が現れはじめたのは、立教から約25年後となる文久、元治の頃からでした。まさに、親神様が「二十年三十年経ったなれば、皆の者成程と思う日が来る程に。」と仰せられた、その年月が経とうとする頃です。

立教から27年目の元治元（1864）年5月。一人の男性が導かれるようにしてお屋敷にやってきました。その人の名は飯降伊蔵といいます。のちに、おやさまが現身をお隠しになったあと、「本席」という立場になられ、おやさまに代わって親神様のお言葉を伝え、さづけの理を渡す役割を担われた方です。

この時、伊蔵さんは、妻が流産をして寝込んでしまっていたところ、庄屋敷村にお産の神様がおられることを人づてに聞いて、お屋敷へやって来られたのです。

おやさまは、

「さあ／＼、待っていた、待っていた。」

「救けてやろ。救けてやるけれども、天理王命と言う神は、初めての事なれば、誠にする事むつかしかろ。」

と仰せになり、こかん様を通じて、三日の願をかけて、散薬（さんやく）を与えられました。散薬とは、当時おやさまがお渡しになっておられた御供（ごく）のことです。

伊蔵さんは、さっそく妻にこの出来事を話し、夫婦で心を揃え、教えられた通りに腹帯を外し、散薬を頂いたところ、少し気分が良くなりました。そこで、翌日の早朝、伊蔵さんはさっそくお屋敷にお礼に来られました。応対されたこかん様から、「神様は、救けてやろ、と仰しやるにつき、案じてはいかん。」と教えられ、さらに散薬をもらい妻に頂かせると、夕方にはずいぶん楽になりましたので、伊蔵さんは、またその夜にお屋敷へお礼に行きました。

そして、三日目には、物にもたれて自分で食事ができるほどまでになり、数日後にはすっきりとご守護いただいたのです。

伊蔵さんは、もともと「千軒切っての正直者」といわれるような方でしたが、この入信の時の様子にも、それがよく伝わってきます。

初めてお屋敷に来られたにも関わらず、おやさまの言われるままに、素直に信じてもたれ切る姿勢、少しの兆しもご守護だと感じる感性、そしてすぐにお礼をと、その都度身を運ぶ態度は、私たち信仰者のお手本にすべきものであると思います。

02 つとめ場所の普請

こうして、妻の身上をたすけていただいた伊蔵さんは、どうすればご恩返しができるだろうかと夫婦で相談する中に、お社を作って、それをお供えしてはどうだろうかと思いつかれました。

そのことをさっそくおやさまに申し出ると、おやさまは、

「社（やしろ）はいらぬ。小さいものでも建てかけ。」

「一坪四方のもの建てるのやで。一坪四方のもの建家ではない。」

「つぎ足しは心次第。」

と、仰せられました。

「社」とは、通常、その中に神様をお祀りするための場所のことですが、この時おやさまが仰せられたのは、「社」ではなく「小さいもの」を建てるようにとのご指示でした。その大きさは、一坪四方（畳二畳分）で良いとのことです。それは、月日のやしろたるおやさまがおいでになられる場所であり、これを芯として、それ以上はどのような広さになってもよい、皆の相談に任せる、との仰せでした（このお言葉の解釈には諸説あります）。

一同で相談をし、結果的に、一坪四方に継ぎ足す形で、三間半に六間（8畳と6畳の部屋が各３室）という広さの建物が建てられました。のちに「つとめ場所」と呼ばれる建物です。

伊蔵さんが、何かご恩返しをしたいと発案されたのをきっかけに、我も我もと賛同の声が上がり、有志の信者たちで材料や費用、手間を出し合い、教祖のお指図に基づいて、一同のひのきしんによって普請が進められていきました。これが、お道の普請の原型です。

このつとめ場所は、完成後、約10年間おやさまがおいでになり、また、信者の参拝所、寄合所、おつとめの稽古場などとして使われるとともに、おやさまが現身をお隠しになられてからは、本教最初の神殿として、改築され長く使用されることになります。

現在も、記念建物として、教祖殿の北側に保存されています。